

上野 田鶴子 UYENO, Tazuko

58年語学科卒(2期) 60年大学院教育学研究科修士課程修了

「来し方を振り返って今」

神戸女学院からICUに進学したのは2期生が初めてでした。英語科(後の語学科)に所属し、小出詞子(ふみこ)先生がアドバイザーで学部を過ごしました。1年次に受ける英語教育はバイリンガルで学ぶための特徴的カリキュラムでしたが、当時、学生数の一割を占めた外国人留学生在が1年で新聞の読める日本語能力を身につける「集中日本語教育」は驚きでした。3年次に初開講された小出詞子先生の「日本語教授法」を学び、4年次にシニアフェローとして教壇に立ちました。英語を仲介語に用い日本語を教える経験をしたことで日本語教育に関心が深まり、卒業後は大学院に進み教育研究科で英語教育を専攻しましたが、TAとして留学生の日本語教育に従事しました。この経験がその後の進路決定に影響を与えることになりました。

戦後、国立大学が初めて留学生を受け入れたのは1962年。9年前に遡る開学時より上級までの日本語を1年で学べる大学はICU以外にはありませんでした。世界一のプログラムと評され、海外の大学からも日本語を学ぶ留学生在が参加していました。J. ロックフェラー四世もその一人でした。

TA時代、母語の異なる様々な留學生に日本語を教えたことで、言語についてより深く学ぶ必要性を感じ、留学試験を受け、ミシガン大学言語学科博士課程に進学。交換留學生として3年、その後ICUの助手を数年つとめ、再度ミシガン大学に。講師として招聘を受け、4歳になった娘と二人で出かけましたが、教えながら学位論文も終え、娘の7歳にいたる第二言語習得、その後の母語習得過程を身近に観察できたことは思いがけない収穫でした。

帰国後、東京大学医学部音声言語医学研究施設に勤務する機会を得、認知言語学の実証的研究に従事し、言語と脳の仕組みについて学際的知見を得たことはその後の研究・教育に極めて重要な礎となりました。この間、ミドルベリー大学の夏期日本語学校に4夏招かれ、教授、ディレクターの任を担いましたが、小学生の娘と共に過ごした寄宿舎缶詰の集中教育には、ICUとミシガン大学で培った適応能力が大いに役立ちました。

1977年に国立国語研究所に日本語教育センターが付置開設され、初めて、国の中心に日本語教育研究の場ができました。国内外の研鑽を生かし、日本語教育の窓を世界に大きく開く必要性を覚え、設置年より14年勤務し、研究室長、日本語教育指導普及部長として、風通しの良いセンターにすべく努めました。当時は女性を室長、部長として起用することの少ない国語研究所でしたが、2005年に研究所の推薦により、秋の叙勲で受章しています。

1990年に新学部設置時より招かれていた東京女子大学に移り、68歳定年まで、女子教育に専念。対照言語研究・日本語教育研究指導を担い、学際的教育を進め、女性の自立とライフワークの必要性を織り交ぜ、指導にあたりました。ICUで学んだりベラルアーツ教育、キリスト教主義教育を生かす場として囿らずも備えられた道程であり、親世代の介護も同時進行のステージにあった私には職住近接の天与の恵みでした。

遠くを眺め、近くを目指し、未知を辿り、多くの出会いと経験を経た今、NPO日本語教育研究所理事長として若い世代と交流をもち、共に考え、多様化する日本語教育界に資する道を模索しながら歩んでいるところです。

酒井 忠昭 SAKAI, Tadaaki

58～61 年自然科学科在籍（6 期）

＜ICU～医学部＞ NS（化学）専攻、3 年まで在学し、千葉大学医学部に移りました。卒後、慶応義塾大学外科に入局しました。ICU 在学時、進路について指導や示唆をいただいた方には、松尾好郎氏（3 期、医師、米国在住）、川上与志夫氏（4 期）、斉藤剛毅氏（4 期）、野村実氏（当時、村山サナトリウム院長）がおられました。

＜病院で外科診療・ICU 経由の医師との出会い＞ 1975 年から都立駒込病院呼吸器外科に所属しました。1986 年当時、偶然にも同病院の研修生あるいは医師として、高橋貴美子（21 期）、片田光晴（21 期）、山田義也（27 期）諸氏が在籍し、4 人の ICU 経由の医師が顔を合わせました。他にも ICU 経由の医師がいることが分かっていたので、「ICU 医師の会」を組織しました。当時、20 数名の名があがったと記憶します。1999 年以降、この会は医師ばかりではなく、幅広い医療関係者と、関心のある現役 ICU 生にも呼び掛けて「ICU 医療関係者の会」としました。現在、登録会員 130 名、例年、交流会等を催しています。この会は会員の情報交換や交流の機会を提供したばかりでなく、リベラルアーツの素養のうえで医師を志したり、行政を含む医療関係分野に進もうとする学生らの相談に乗ったり、助言を提供しました。

＜がん末期への対処＞ 都立駒込病院では肺がんの外科治療が主な仕事でしたが、術後再発して再入院する患者さんも多くおられました。当時がん末期への対処は十分ではなく、患者さんは惨めな入院を続けていました。病院ではホスピス設置を検討しましたが、私は一足飛びに在宅療養の方が患者さんの希望だと感じました。

＜在宅診療＞ 1996 年から在宅医療のグループクリニック（ライフケアシステム・水道橋東ロクリニック）に移りました。当時、在宅診療に従事する専門家は少なく、どうしたら在宅診療が普及するかを考えていました。2002 年に英国で在宅ケアを調査・研究する機会があり、そこで多種職が協力して優れた在宅ケアを実施している姿に接し、この分野は専門看護師の主導でチームケアを進めることが適切だと考えました。

＜NPO 法人ホームケアエキスパートズ協会＞ 英国の経験に基づき在宅ケアの質の向上と優れた専門家の育成のために、2007 年 NPO 法人ホームケアエキスパートズ協会を設立しました。訪問看護ステーションを中核に、医療・介護保険でも賄えないサービスを提供し、高齢者、がん患者のポジティブ・ウェルフェアを目指しています。多くの同窓生から多大なご支援をいただいております。とりわけ NPO 役員の秦道夫、泉信也、鈴木文雄、徳永浩諸氏には本当に献身的なご協力をいただいております。むろん、ここで名前をあげるスペースのない多くの同窓生の協力者もあって、この活動が成立していると感じております。NPO という組織は理念を軸にして活動するといっても、現実には困難なことが多いと思います。ICU という共通基盤が支えになって、活動が継続していることを実感しています。

＜著作＞ 「インフォームド・コンセント」（フェイドン著、共訳、みすず書房 1994）「医療倫理の夜明け」（ロスマン著、監訳、晶文社 2000）「在宅ケアとリビングウィル」（共著、日本評論社 1998）「死の人間学」（共著、金子書房 2007）

小山 修三 KOYAMA, Shuzo

64年人文学科卒（7期）

考古学・民族学・博物館 一異文化と向き合う一

縄文土器のかけら キャンパスでひろった縄文土器のかけらが私を考古学の道に押しやった。力強い渦巻文、「この場所」で、どんな人が、何を考えて暮らし、こんなものをつくったのだろうとイメージが膨らんでいった。卒業してキダー先生の助手をしながら國學院大學へ、そのあと、フルブライト奨学金を得てカリフォルニア大学(デイビス)で学んだ。博士論文は縄文時代の食料と人口で、ICUで始めたコンピューター分析が役に立った。なんとも長い回り道。もともと絵を描くのが好きでアカデミーには興味はなかったのだが、発掘や一次資料を直接あつかえる仕事が身にあっていたのだろう。

みんぱくでの活動 1976年から国立民族学博物館に勤めた。『知的生産の技術』の梅棹忠夫さんが初代館長で、創設時の勢いとアイディアにあふれていた。とにかく、フィールドを見つけ調査に行けと。ところが、民族学だから考古学はだめ、と言われてまいった。1980年からはオーストラリアでアボリジニ社会の調査を始め、それが20年以上にわたる仕事になった。狩猟採集民の小さなムラに住み込んでみると、まるで縄文人と暮らしているようだった。逆にお前の国に連れて行けと言うムラ人たちを展覧会や公演で日本に呼んだときの反応がおもしろかった。旅は偉大な教育であることが分かった。

再び縄文へ 1993年に青森市の三内丸山遺跡で直径1m以上あるクリの木の6本柱が見つかって、マスコミが大きく報じ、ブームが起こった。考古学の現場からは遠ざかっていたのに、何となくまきこまれてしまった。これまでたくさんの遺跡が注目され、その多くが忘れ去られてしまうのを見たが、ここではボランティアの活躍が行政を動かして、研究施設をとまなう遺跡公園ができた。今は世界文化遺産をめざして奮闘中、文化を支えるのは市民であることを痛感した。

吹田博物館 定年後はフリーターになって自然観察や飛騨地方の歴史を楽しみながら暮らそうと思っていた。しかし、吹田市長から博物館に人が来ない、何とかならないかと相談を受け、館長職を引き受けた。日本に近代的博物館ができたのは明治5年（1873年）だったが、国営の教育施設としたために、お上目線のおもしろみのない博物館がつけられ、それが不振の原因だろうと考えた。そこで「市民に開かれた博物館」を目ざし、企画・運営・管理の一翼を市民に担ってもらうことにした。吹田市には千里ニュータウン、大阪万博という好材料がある。それらを取り上げることで観覧者数が飛躍的にのびた。

さわって楽しむ博物館 博物館では展示品にさわるとはタブーになっているが、これに挑戦することにして、みんぱくの全盲の学者、広瀬浩二郎さんと研究会を立ち上げた。もくろみは成功し、視覚障害者を含む研究者とアーティストが集まり、さわって楽しめるユニバーサルな博物館をつくる動きが盛り上がっている。障害者から絵にさわりたいという要望が出たことに意表をつかれた。これは、認識論に通じる哲学的な問題であり、異文化理解にも関わるものである。答を出すのは簡単ではないが、博物館のあり方も含め大きな問題を提起したと、これからの進展に期待をかけている。

リベラルアーツ教育 このように自分の経歴を追ってみると、「この道一筋」という学者像からは外れた足跡をたどってきたと思う。私としては「現実」に精一杯対応しただけである。それができたのは、ICU建学のチャレンジ精神とリベラルアーツ教育のおかげだったと考えている。

有馬 利男 ARIMA, Toshio

67年社会科学科卒（10期）

『ケチな夢だネー』、今でもあの柔らかな神田盾夫先生の表情が目に浮かび、声が耳に響く。ICU2年生の頃、私は先生の犬を散歩させるアルバイトをしていた。散歩のあと、イギリス流アフタヌーンティーを頂き、先生とお話できるのが大きな特典であった。ある日、先生から『君は将来何をやりたいのかね？』と聞かれ『はい、海外で仕事をして暮らしたいです』と馬鹿な答えをした私に対する先生の一喝は私の心にグサッと刺さった。

『ケチじゃない夢とは？』、この解を求めて呻吟した私はICUに5年間いることになったが、結果として富士ゼロックスに会う幸運に恵まれた。富士ゼロックスは、創業者であるJoe Wilsonの言葉『我々のビジネス・ミッションはコミュニケーションを通じて世界の人々の相互理解を進めることである』を理念としていた。創業4年目の小さなベンチャー企業ながら、世界初の技術と商品を今で言うソリューションを通じてグローバルに展開しようとしていた。この会社なら『ケチじゃない夢』に取り組めると若い血が騒いだ。その後の私の企業人生は、コミュニケーションのシステムを創出し展開し、その事業を通して社会に貢献をする、はたらき方やその環境を変革する、そしてこのベンチャー企業を大きく育て、世界に飛躍させることであった。仕事は面白く、やりがいに溢れていた。私は日本と海外で仕事をしながら経験を積み、マネジメントの階段を上り、小さいながらも夢は現実になっていった。社長就任の指名を受けたのは驚きであったが、株主の期待は経営基盤の抜本的な変革、そして収益力の飛躍的な向上と成長であった。社員の努力のお陰でそのミッションは達成したが、私の夢の続きはこのような企業活動の根源となる経営哲学の確立であった。私がリードしたタスクチームの結論は『企業品質』というコンセプト。品質の高い企業とは『経済性と社会性、人間性を統合的に追求し、それを通じてイノベーションを起こすサステナブルな企業』という考え方。今それは富士ゼロックスCSR基本理念として位置づき、私は今もアドバイザーとしてその考え方の組織浸透をサポートしている。

社長を退任した今、私は、いくつかの社会的組織の活動に参加し、CSRの推進や、世界各地での緊急人道支援、はたらき方の変革などに取り組んでいる。また、多くの機会を得て若い世代に語りかけている。そのような場で私の経営者としての経験を生かし思いを伝えているが、むしろ私自身が新しいフィールドについて多くのことを学んでいる。

ICUで得たものを宇宙旅行に例えると、『フレマン』は、先ず私を軌道に乗せたブースター、『リベラルアーツ』は、軌道を外れないように牽引してくれた地球の引力、そして、『神田先生のあの一言』は、宇宙船の旅の苦しい時に常に私を蘇生させてくれたフレッシュエアーと言えるかも知れない。神田先生のあの一言に出会えた私は幸運であった。

朽木 ゆり子 KUCHIKI, Yuriko

74年社会科学科卒（18期）

76年大学院行政学研究科修士課程修了（博士課程前期）77年7月まで博士課程後期在学

卒業してからかなり長い年月がたちましたが、ICU時代に得たものはいまだに私の礎になっています。

まず、ICUで学んだのは、人と違ってかまわない、ということでした。父親の仕事の都合で何度か転校はしたけれど、それまでずっと日本の公立学校で教育を受けてきた私にとって、ICUは大変まぶしいところでした。時代は60年代末。ベルボトムジーンズに長髪のカリフォルニアから来た学生が闊歩するキャンパスは、それだけで日本ではない場所のようだったし、英語と日本語をセンテンスの途中で切り替えるような人がいるというのも驚きでした。それぞれ育った背景が違って、教育を受けた場所（国）や言語も違うから、考え方も違うのは当たり前だということが無理なくわかりました。むしろ、人と違ってほほうが面白い、と思うようになりました。

高校時代まで、私はどちらかというと文学、音楽、アートなど人文系に興味があったのですが、60年代の後半、70年安保前夜の〔政治的〕な時代に高校生だったことから、もっと社会に目を向けるべきだと（当時は単純に）思い、ICUでも社会科学科に入学し、外交史と国際政治を専攻しました。ICUでは大学でも大学院でも、原資料（英文も含め）を多く読まされました。資料を読むのが怖くない、むしろ楽しいし、必ず発見があると思うのはそんな訓練から来ているし、結果として、現在の私の仕事に大きな影響を与えています。いまから考えれば、それもリベラルアーツ教育だったのだらうと思います。

私が選ぶ題材は美術に関連したものが多いのですが、アプローチは美術史を勉強した人とはかなり違ってきます。最初はあまり意識しなかったのですが、読者にその点を指摘されてから、むしろ美術品が社会の中でどんな価値を持って、社会にどんな影響を与えているかを常に念頭において書くようになりました。ただ、ICU時代に美術史をもっとしっかり勉強しておけばよかった、と後悔することも多々あります。反面、美術のアウトサイダーとしての客観性がプラスになっていると（ずうずうしくも）思っています。

ICUでは学部で5年、修士で2年、博士課程後期に1年と1学期、その後にコロンビアの大学院に3年と、非常に長く大学にいました。最初は学者になるつもりだったのですが、最終的に気持ちが変わってジャーナリストになりました。ですから、留学から帰ってきた時には30歳になっていたのも、社会人としては大変遅いスタートでした。その後も、雑誌編集者になったのは30代後半、自分で書いた本（翻訳書ではなく）を最初に出版したのは50歳ですから、すべてが遅いスタートです。ICU生活でマイペースを獲得した私は、それは全く気になりませんでした。

大学在学中、あるいは卒業してすぐに自分のやりたいことがわからないのはむしろ普通かもしれません。目の前にある仕事に取り組んでいるうちにそれは見えてくるし、振り返ってみてはじめて大学教育の重要性を理解することができると思います。

陳 新滋 Chan, Albert Snu Chi

75年自然科学卒（19期）

私は1971年香港の選考により、ICU入学のためのUBCHEA（アジア・キリスト教高等学校連合理事会）の奨学金を獲得することに成功した。海外留学生がICUに入学するのは通常9月ということになっていたが、私は中国大陸出身者であったのでビザの取得に時間がかかり11月下旬入学になってしまった。一学期は日本語の集中講義から始まったが、プログラムはかなりコンパクトで先生の授業速度はとても速かった。9月入学の同級生達もコースに追いつくのもやっとであった。私は当時50音順さえ覚えていなかったのに、授業に際しどんなにか苦労したかとは想像ができるであろう。幸いなのは先生方は時々補習授業をしてくれたので、コースの従えには大変助かった。クラス担任は小出詞子先生で、教への礼儀に対しても厳しいが、大変やさしい心をお持ちの方で、日曜日にも補習授業をしてくれた。教室に鍵がかかって入室できなかった時など自宅にお招きいただいて授業をしてくれた。私達をわが子のようにいたわっていただき、本当に深い感銘を受けた。まだ新米の正宗美根子先生は何時もにこにこ穏やかでとても頼りになる方であった。香港から来た学生たちは先生の“正統な美人”というお名前に引かれ、すぐに先生のファンになってしまった。他の先生方にも親身になってお世話いただいたので、なお一層私たちは勉学に励むことができた。私は日本語の基礎的な知識力に乏しかったので、初めには人一倍苦労した。皆に速く追いつこうとして大変な努力をした。昼間授業で教えられた日本語をテープに録音し、夜寝る前に必ずイヤホンで聞きながら眠りに入った。つまり復習しながらベッドに入ったわけである。数ヶ月も経った頃には同級生にも追いついていた。こんな形で復習した結果、夢の中でも日本語を話す自分に気が付いた。

ICUの最も大きな特徴は、教える先生方が学生達に気遣い、彼らに深く関心を持って頂けることだと私は思っている。香港からの学生はそれほど多くないので特に配慮していただけたものと思っていた。入学当初、教養学部のWorth学部長は私達を恒例のゴルフコンペの昼食会に招いてくれた。そのときの石焼ステーキの味はとても素晴らしいもので、私にとって生涯忘れられない昼食となった。

入学後の間もない頃、化学担当のRich教授に会ったが、先生は私の生涯に決定的に影響を与えることになった。Rich先生は私が勤勉であることに大変興味を示し、一年生のときから先生の実験のお手伝いを仰せつかった。このような機会は若い学生にとっても極めて得がたく貴いものであった。先生の研究室でお手伝いできたお陰で、基本的な実験方法を学ぶことができただけでなく、私の将来の研究活動にとっても有益なものが得られた。更に特筆すべきは、積極的に問題解決の道を探る能力が身についたことである。ICU卒業時に私はシカゴ大学入学選考のための奨学金獲得に成功したが、あいにく渡米する旅費を持ち合わせていなかった。Rich先生はこれを知るや、即座に資金をご用意下さった。そのお金で私は無事、航空券を購入できたのである。今でも先生とは密に連絡を取り合っているが、先生は恩師でもあり一生の友人でもある。

シカゴ大学に到着したものの、あまり慣れなかった。一つには恐ろしいばかりの冬の寒さであった。大風大雪の厳しさは香港及び東京では経験できないほどで、生活すること自体大変であった。二つ目はシカゴ大学の学術レベルの高さであった。教科書は2-3週間に一冊の割合で終了するのが常であった。このような授業ではストレスも大きく、学生たちにはとても耐えられないのではないかと思ったほどである。幸いにも

私には ICU での経験があったので、厳しい環境にも雰囲気にもなれることができた。奮闘努力の結果、半年後には指導教官である Halpern 先生と共著で論文を発表することができた。これは人を励ましめでたいことであった。これが基礎となって、今後の研究活動は気楽で順調に進捗することとなった。

Halpern 先生は国際的に著名な科学者で頭脳明晰な方であった。他人と議論するときにもストレートに発言し、全てを洗いざらいさらけ出してくれる人であった。こんな風だから多くの若い研究者達は彼を恐れていたが、私は怖いもの知らずなのか、それとも「人の師となる者は厳かでありこれを尊ぶべきものである」と考える中国人でもあるためなのか、全く恐さを感じなくて、Halpern 先生と仲良しであった。先生は学会出張が多く、あまり研究室には来られなかったので議論できないから困るというポストドックや学生たちもいた。しかし私にとってはこれは極めて幸運なことであった。それは私が発揮できる広がりと自由度をあたえてくれたものであり、独立心を養うために大いに役立った。私の博士論文は不斉接触水素化反応 (asymmetric catalytic hydrogenation) のメカニズムを明らかにするもので、これは不斉接触水素化反応過程で主要中間体が微量物質に変化し、この微量中間体が速やかに主生成物を生み出すというものであった。ほとんどの科学者達はこの発見を奇異に感じたものであったが、今でも私の当時の発表論文を基に盛んに議論されているところである。この発表が縁で、不斉接触水素化反応の発見者 Dr. Knowles (彼は発見者でありながらそのメカニズムを十分に説明し得なかった) とも友人関係になることができたし、また彼の紹介で Monsanto 社へ就職し、一緒に仕事をするようになった。

私は Monsanto 社で 12 年間仕事を続け、7 年間には四級職の Monsanto Fellow に昇格した。仕事は順調楽しい日々であった。しかしこの間に今でも難解なこと一つがあった。それは ICU へ戻って化学を教えている姿を何回も夢に見たことである。もしフロイトの理論で占うなら、これは私が教育と ICU を特殊に好感する感情から派生したからだと思った。

1992 年の夏、偶然的にも台湾大学で客員教授を務めることができたが、これを機会に再び正式に学術に復活することになった。教育の仕事は実に人生の中で好適で享受できるものであった。若い人達と一緒に居ることは若さを保つ最良の方法である。1992 年から開始して 20 年間も教育の仕事を手掛けた。その間、台湾大学、中興大学、香港科技大学及び香港理工大学で教え、今は香港浸会大学で教えている。これらの大学では、客員教授、教授、主任教授、学部長、院長、副学長を経て、今は学長を務めているが、毎日仕事の楽しさを味わっている。私の学術研究の生活はかなり順調に推移し、今までに 500 編以上の論文を発表しているが、これらの論文の幾つかは一万回以上も他の論文に引用されている。また重要な発見にも繋がり更に産業界でも役に立っている。これらの業績の一切はおそらく ICU での素晴らしい教育を受けられた賜物であったと考えられている。ICU のリベラルアーツ教育 (Liberal Arts Education) は確実に人生の基礎づくりのための最善のものである。私は今でも UBCHEA に非常に感謝している。これがなかったら、私は ICU で素晴らしい教育を受けることが出来なかったからである。

香港浸会大学の学長として考えるに、本学の教育理念と ICU のそれとは非常に似通っているということに心さわやかさを覚える。私たち全員が、キリスト教の優れた伝統にフォローし、全身全霊を以ってホリスティック教育 (Whole-person Education) の仕事に尽くしたいものである。将来両大学は更に交流を深め、あらゆる面で協力し合うことを願ってやまないものである。

粉川 直樹 KOKAWA, Naoki

77 年人文学科卒 (20 期)

ラグビーに明け暮れた学生時代が終わり、自分のしたいことを求めて 2 年近くふらふらしていた 1979 年 10 月、カンボジア難民が忽然としてタイ国境に現れた。日赤が医療班を出すという新聞のベタ記事を見た私は、赤十字の門をたたき、赤十字国際委員会の救援現場で働く機会を与えられる。国境に集結したカンボジア難民と共に病院を作り、カンボジアを越えて徒歩で逃れてきたベトナム難民を国境のキャンプにて世話する。1982 年から 1 年間、ソマリアにてオガデン難民の救援活動にあたり、ジュバ川の畔に設営したテントキャンプで生活する。翌年から 6 年間、当時は平穏だったネパールで開発事業に従事。その間に結婚して長女・次女が生まれ、1989 年から内戦のスリランカで国内避難民の救援に当たる間に、三女が生まれる。幼い娘を抱えて 1991 年にエチオピアに赴任、メンギスツ政権が崩壊した直後で治安が極度に悪い中、干ばつ被災者やソマリアから戻ってきた難民・国内避難民への支援に当たる。1993 年にスイスの国際赤十字本部に移り、中東を担当。国連制裁下のイラクや、オスロ合意直後のパレスチナ西岸地区、レバノンやシリアのパレスチナ難民を支援する。

1997 年からは日赤東京本社の国際救援責任者として、1999 年のトルコの地震に始まり、イラン地震 (2003 年)、スマトラ津波 (2004 年)、パキスタン地震 (2005 年)、ミャンマーサイクロン、四川省地震 (2008 年)、ハイチ、チリの地震 (2010 年) と発災直後の現地に飛び込み、国際赤十字の同僚たちから「粉川が行くところに災害が発生する」と言われた。また、1999 年のコソボ、9.11 の後のアフガニスタンなどの紛争犠牲者の支援活動に当たると共に、北朝鮮の人道支援、南アフリカの HIV/AIDS や干ばつによる食料危機などの対応に当たる。その間、スマトラ津波の復興事業のために、インドネシアに 1 年間 (2005 年)、その後、国際赤十字赤新月連盟のアジア・太平洋州の災害対応部長としてマレーシアに 2 年間赴任する。東日本大震災においては、世界の赤十字から日赤に寄せられた 600 億円のドナー対応を担当、援助する側から援助を受ける側に立ち、これまでの経験を生かす。

世界は気候変動、人口増加、環境問題、都市への人口移動と無計画な開発等により、災害の数は増え、かつ激甚化している。また、劣悪な住居に住み、十分な食糧、医療、教育が受けられず、貧困や差別にあえぐ人々の数は一向に減らない。そのような現実を目のあたりにしながら、Think Globally, Act Locally ではないが、私はここ 15 年ばかり、牛久の田舎で野菜を作り、果物の木を植え、家には冷房を入れず、冬には薪ストーブから暖を取り、石鹸を作り、味噌、梅干しを作ってきたが、もっともっと自給自足に近い生活に近づきたいと思っている。そのような生活が、世界の抱える問題の解決にどのように繋がってゆくのか、退職後の在り方を含めて考えている今日、この頃である。